
紀年銘をもつガンダーラ彫刻の年代について

紀年銘が刻まれるガンダーラ彫刻のうち、出土地の分かっているものは4点ある。①スカーラー・デリー遺跡出土ハリティー立像、②パルトゥー・デリー遺跡出土仏陀立像、③ママーネ・デリー遺跡出土「インドラサーラ窟内で瞑想する仏陀」浮彫、④ローリヤン・タンガイ遺跡出土仏陀立像である。私は、それらの紀年銘が示す西暦年代をそれぞれ、①132/3年、②237/8年、③242/3年、④251/2年にあてた。

紀年銘をもつガンダーラ彫刻は、様式の年代を示す材料として、これまでさまざまな研究者によって用いられてきた。しかし、その西暦年代についての見解は、研究者ごとに異なる。その原因は3つある。研究者ごとに、紀年銘の解釈が異なる点、紀年銘の年代をあてはめる暦が異なる点、そして、暦の開始年についての見解が異なる点である。これらによって紀年銘の西暦年代は安定しないので、紀年銘彫刻からガンダーラ彫刻の様式年代観を組み立てるのは不可能である。まず、別に様式年代観を組み立て、その次に、その年代観にこれらの彫刻をあてはめるのが、これらの彫刻の扱い方としては正しい。

より安全な様式年代観を構築するために、私は、これまで公開されたペシャーワル盆地（古代ガンダーラ地方）の発掘報告書から、彫刻の様式年代に関わる情報を抜き出した。バーラー・ヒサル遺跡では、寺院廃絶後の時期の層から、定型化した様式の彫刻が出土した。また、シャイハーン・デリー遺跡から出土した彫刻のうち、ほとんどの彫刻は、衣文が写實的に表される一方で、1点のみは、衣文が定型化した表現で表される。定型化した表現は、この遺跡の廃棄時期近くになって現れたのであろう。出土貨幣の検討から、遺跡の廃棄時期は西暦3世紀前半頃である。②③④の紀年銘彫刻は定型化した衣文表現をもつ。だから、これらは3世紀前半以後に作られたものである。衣文の定型化の度合いから、これらは、②、③、④の順に並べられる。①の像は、スワート地方の様式年代観を応用すると、1世紀に現れていた様式に属す。

次に、紀年銘の計算にどの暦が用いられたかを、出土碑銘から考えた。ペシャーワル盆地とその周辺から出土した、紀年をもつ碑銘は43点ある。その中の9点には、「Aya(Azes)の」と書かれ、アゼス紀元が用いられる。他に、「カニシカの」と書かれるものが2点ある。タキシラ出土銀製巻物や、カーラワーン出土銅製板の銘から、クシャーン朝時代になっても、アゼス紀元が用いられたことが分かる。この時代のこの地域では、主にアゼス紀元が用いられたのである。最近の研究によれば、アゼス紀元の開始年は西暦紀元前47/6年である(Falk & Bennett 2009)。この暦に、①「179年」(Quagliotti 2000)、②「284年」(Bivar 1970)、③「(2)89年」(100年表記省略についてはLohuizen-de Leeuw 1949)、④「318年」の紀年銘をあてはめて西暦年代を算出した。

発掘成果から導き出される様式年代観と、アゼス紀元で計算された紀年銘彫刻の年代は矛盾しない。